

口腔医学の創設・育成

本学園は、「福岡歯科学園の中期構想」に掲げた「口腔医学の確立」の実現に向け、口腔医学(口腔科)を創設・育成するという基本理念を広く社会にアピールしています。

学校法人福岡歯科学園

福岡歯科大学

理事長 田中健藏

学長 本田武司 学生部長 北村憲司

医学・医療の進歩、社会経済環境の改善などにより、わが国は世界一の長寿国となった。また、世界の人口は急増し、2020年には90億人になるといわれるが、先進国では少子化が進み、我が国でも総人口は今より数%減少するといわれている。一方、人口構成の中に占める65歳以上の人口は現在より35%増加し、3人に1人は高齢者になると予想されている。

既に、高齢者の介護、年金の圧縮、医療費の負担増などが大きな社会問題となっているが、今後、人口減少による国の活力の低下など更に大きな問題が待ち構えている。このような基本的課題に対する対策が今後必要であるのは当然であるが、高齢社会の中にあっては、歯周病、口腔領域の癌、誤嚥性肺炎などが増加するため、口腔領域を専門とする医師は更に重要な役割を担うと考えられる。

1. 疾病構造および口腔疾患の時代的変遷

昭和22年から現在までの死亡率の年次推移を見ると、疾病構造は劇的に変化し、対象となる患者層も変化した。歯科領域では、むし歯は減少し、歯周病、口腔癌、さらには全身疾患に関連した口腔病変、他科疾患の治療に合併する口腔病変などが増加している。

高齢者の生活の質(QOL)の改善という観点から見ても、摂食、嚥下のコントロールを含む口腔介護(口腔ケア)の充実、口腔疾患の防止だけではなく、高齢者の生活習慣病の予防や、日常生活の活性化(ADL)を向上させる上で極めて重要なことである。特に、口腔インプラントの普及は食事、会話など、快適な日常生活にとって貢献するところが大きく、担当する歯科医師には全身管理を含めた医療に対応する能力が求められる。

このように医科医療全般と歯科医療とは、口腔を接点として、ますます密接に関連しあってくると考えられる。

2. 歯学(歯科)から口腔医学(口腔科)へ

歯科医学・歯科医療はこれまで医科と分離した体制で発展し、その教育体制も医学教育とは別個に歯学教育として独立して行われてきた。遠藤周作氏は「変わるものと変わらぬもの」という著作の中で、歯学が医学と切り離されて教育されていることに疑問を投げかけられている。もともと眼科や耳鼻咽喉科に比べて、歯科には医学的な基盤を持つ口腔外科や歯内療法に加え、補綴治療(眼科の義眼作成、耳鼻咽喉科の補聴器作成などにあたる)に大きな比重があった。そうした状況が医科と歯科を別に考える原因になったと思われる。しかし、高齢社会の中で求められる歯科医師の育成には、医学教育の一環として歯科医学が教育されることが不可欠であろう。

医科医療、歯科医療の今日までの発展には、それらに関係した多くの先人のたゆまぬ努力があり、現在の仕組みにも利点は多い。従ってそれらの利点を損なわずに現行制度を改変することは大変難しいことでもある。しかし、一般医科医療の知識と修練とを十分に受けた者が口腔疾患の治療に当たること、国民の健康増進に対する歯科医師の貢献は飛躍的に大きくなるのは間違いない。21世紀の歯科医療は、このような観点から検討することが重要で、口腔という臓器の疾患の治療や予防を担当する分野として、口腔医学(口腔科)を創設することが必要と考えられる。医療体制全体の一つの専門科として、口腔医学(口腔科)を位置づける

とが、新時代の国民医療を考える上で、最も妥当な改変であり、発想の転換としても意義があることと考えている。

3. 歯科大学の改変

口腔疾患の医療を受ける患者の立場からすると、口腔という専門領域についての優れた知識、技術に加えて、全身疾患を勉強し、医学全般の研修を受けた者から治療を受けるようになることは、大変喜ばしいことである。そのために、現在の歯科大学の中にあっても基礎医学はもとより、臨床医学についても全般的な教育を行うことが望ましい。歯科系大学院は医科系大学院と連合して、口腔領域疾患についての研究レベルを向上させることも必要である。

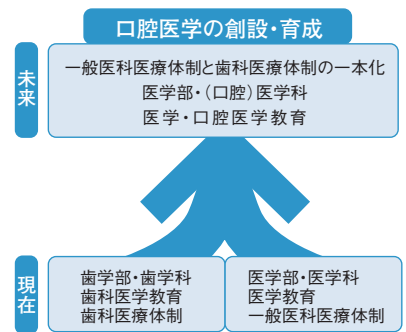
また、歯科大学の附属病院は口腔医学教育を行うために十分な医科診療科を持つ医科歯科総合病院となって、一般医学の講義、実習を充実する必要がある。国立大学法人が法人化を契機に、医学部と歯学部との附属病院を一体化したことや大学院を合併して、医歯学総合研究科としたことなどは特筆に値する改革であり、医歯学統合の先鞭とも考えられる。

なお、医科と歯科との現在の医療経済における位置づけや制度にも、いろいろと問題があり、大病院には口腔科を必ず開設することとして、口腔医の研修の場を確保することや介護老人施設に歯科医師・歯科衛生士の配置を義務づけ、口腔ケアの充実、高齢者歯科教育の推進をはかることも必要である。

歯科医学は医学全般と不可分、もともと一体のものであり、最終的には医学と歯学とが一体化して、医学全体の一専門分野として口腔医学(口腔科)を位置づけることが、社会のニーズに対応し、国民の健康増進により一層寄与出来るのではなかろうか。あるべき歯学、歯科医療の将来像について、歯科大学、歯科医学会、歯科医師会等が真剣に考えることが重要であり、さらに関連する医科関係の大学や学会、医師会等と充分協議することが必要である。

4. まとめ

新時代の医療、殊に口腔疾患対策としては、歯学から口腔医学へと医療概念を変換し、口腔という臓器の疾患の予防・治療を担当する口腔医学(口腔科)を創設・育成することが望まれる。そのためには大学、歯科大学の教育体制を改組し、医学全般の教育を強化する必要がある。そして、最終的には、現在の医療体制と歯科医療体制とが一体化し、口腔医学(口腔科)という医学全体の一専門分野を創設することが、社会のニーズに対応し、国民の健康増進に大きく寄与すると考えられる。各界での慎重かつ積極的な検討が期待される。



本学卒業生関根浄治氏、鳥根大学医学部教授に

福岡歯科大学第11期卒の関根浄治氏が平成19年6月1日付で、鳥根大学医学部歯科口腔外科学講座教授に就任されました。



せきね じょうじ
関根 浄治 教授

専門分野:口腔外科(口腔癌の切除と再建、インプラント法による顎口腔機能再建、顎口腔領域の細胞診)

略歴

本学卒業後、長崎大学歯学部助手、歯学部附属病院講師、大学院講師、スウェーデンウメオ大学顎顔面口腔外科客員教授を経て平成19年6月現職就任。博士(歯学)。長崎県出身。

抱負

口腔病変の切除～形態・機能再建という一貫治療を通して人に優しい口腔外科医の育成に臨む所存です。

母校の恩師ならびに同窓会会員の先生方にはこれまでのご指導に感謝申し上げますとともに、今後ともさらなるご支援を賜りますようお願い申し上げます。

福岡歯科大学 平成20年度入試からAO入試実施

本学のAO入学試験制度は、歯科医学を学び、歯科医師を目指す意志が明確で、次代の歯科医学をリードできる、若く、有能な人材を全国から広く募集する制度です。この入学試験において、特に優秀な成績をもって合格した人に対して、勉学に専念できる環境を支援するため、独自の奨学制度「福岡歯科大学学生共済会学術奨励金」を設けました。

※日程等は、12ページをご覧ください。